

2020 年 8 月 3 日～8 日 各家庭でのディボーション用テキスト

[盲 目]

この暗く広大な世において 生涯の半ばを終わらぬ先に
自分が盲目になってしまったことを考えるとき
私のうちに一つの賜物が一死だけがそれを隠します—
それにより私の魂がもっと熱心に創造主にお仕えし
その方が帰って来て叱責されることのないように
ほんとうの会計報告を出そうと願っていました
むなしくとどまっていることを考えるとき
私はあさはかにも尋ねたのです
「神は光を取り去りながら
私に日雇いをさせようというのだろうか」と
しかし、忍耐がそのつぶやきを妨げて すぐに答えました

「神は人の働きも人のささげものも要しません
神の軽いくびきを最善に負う者は
いちばんよく神に仕えるものなのです
神は王者のような方 幾千の人がその命令によって急ぎま
す
陸を越え 大洋を越えて 休むことなく行くのです
耐え忍んで待っていなければならない者たち
彼らもまた奉仕する者なのです」

ジョン・ミルトン

■困難における訓練（前編）

すると彼は立ち上がって、イエスに従った。（マタイ 9:9）

生涯をかけた事業を達成するためには、どうしても乗り越えてゆかなければならない大きな困難がある。人はこのような困難を見て、ことばもなくたたずんでしまうことがよくある。『ペルーの征服』はその姉妹篇『メキシコの征服』とともに、歴史書の中の不朽の名作として広く知られている。しかしながら、それがどれほど大きな身体障害を乗り越えて書かれたものであるかをよく知っている人は、少ないようである。著者ウィリアム・プレスコットは、アタワルパ（南米インカ帝国最後の皇帝）、ピサロ（インカ帝国を滅ぼしたスペインの探検家）、アルマグロ（スペインの新大陸征服者。ピサロに殺された）、その他の人物について書いた画期的な物語の序文の中で、謙遜な態度で自分のことを語っている。

私は大学在学中、片方の目を負傷して視力を失った。もう片方も、その後まもなくひどい炎症を起こしたために、しばらくの間この視力も失った。後者のほうは、回復することはしたが、非常に視力が衰えたため、連続して何年も、その目を読み書きのためには使用できなかったことが、それ以来二度もあった。私がマドリッドから『フェルディナンド王とカトリック女王イサベラ両王治世史』のための資料を受け取ったのは、そのような時期のことであつた。こうした無能状態にあるときに、大西洋のかなたの事情を伝える貴重な資料に取り囲まれていたのであるから、私はあたかも、あり余る食物に囲まれながら、飢えのためにやつれてゆく人のようであつた。こうした状況の下にあって私は、もしできることなら、目のする仕事を耳にやらせてみよう

と決心した。まず、秘書をひとり雇って、権威ある種々の資料を読み上げてもらった。そうしているうちに、私は諸外国の発音によく通ずるようになったので（海外に住んでいた私は、それらの外国語の幾つかになじんでいたのである）、秘書の読んでくれるものを、それほど困難も感じないで理解することができた。

もう一つの困難が生じた。書くという機械的な仕事が、目に対して非常にきびしい試練となっていることに気づいたのである。しかしこれは、盲人が使っているような点字器の利用により、視力を用いなくても自分の思想を紙面につづり、暗い所でも明るい所でするのと同じように、目的を果たすことができた。

私は、仕事の進展に意を強くしていたが、それは必然的に遅々とした進みぐあいであった。ところが、そのうちに目の炎症も快方に向かい、視力も回復してきた。ついに、一日に数時間も読書できるまでになった。ただしそれは、日光の下に限られてはいたが……。

しかし、この二年間にまた別の変化が起こった。視神経のほうは非常に敏感になってきたが、視力が鈍りはじめ、昨年などは、数週の間一冊の本も開くことができず、全期間を通じて平均して一日一時間以上目を使って読書することができなかつたのである……。

以上の記述から一私はそれが、読者にとって忍耐しきれないほど長々しいものだったのではないかと恐れるのであるが一このような問題に関心を寄せてくださる読者はきっと、私が、どれほどどぎまぎしながら自分の経歴を書いているかを、理解してくださると思う。目が最上の状態にあるときでも、その使用は制限されており、また全く使用できないときが多かったことを考えるなら、この試練がそれほど軽いものではなかつたということは、容易に認めていただけると思う。しかしながら、私が戦わなければならなかつたこの困難も、盲人の方々の味わっている苦しみに比べれば、ずっと小さなものである。私の知っている限りでは、いま生きている歴史家のうちでこのような障害にみごとに打ち勝った人は、『ノルマン人の英国征服』の著者だけであると思う。彼自身の感動的な美しいことばを借りれば、彼は「自分を暗やみの友とした」。そして、うちからの光以外に光を必要としない深遠な人生観に徹し、その上さらに、研究者に最もきびしい献身的な努力を要求するような広範な種々さまざまな研究に従事しうる能力を兼ね備えていたのである。

困難における訓練とはこれである。それを理解し、勝利を得るのは、不屈な心を持つ者だけである。恐れを知らない者だけが、頭が痛み、視力が衰えているにもかかわらず、「他の人こそ私よりも大きな困難に直面している」と言うことができる。その水準に達していない人は、自分を取り巻く病氣、悲哀、沈黙などにのみ込まれてしまう。（次回に続く）

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第十八章「困難における訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。